

テレビの字幕放送への期待

水野 映子

<身近な存在になった字幕放送>

テレビの字幕放送をご存じだろうか。

字幕放送は、テレビの音声を聞き取りにくい人などが内容を理解できるように、セリフやナレーション、効果音などの音声情報を文字で表示するものである。表示するか否かを切り替えられる字幕放送（クローズドキャプション）は、どんなテレビでも表示されるテロップや洋画の字幕など（オープンキャプション）とは異なる。

字幕放送は、地上アナログ放送で受信するためには専用の装置が必要であるため、以前は一部の人しか見ることがなかった。しかし、2003年12月開始の地上デジタル放送に対応したテレビでは、字幕放送の受信機能が標準装備になったため、基本的にはリモコンの字幕表示用ボタンを押すだけで字幕を表示することができる。また、2006年4月に始まったワンセグ（携帯電話などで受信できる地上デジタル放送のサービスの1つ）でも字幕が見られる。近年、地上デジタル放送対応のテレビやワンセグ対応の携帯電話が普及したことにより、字幕放送は以前に比べると一般の人々にとって身近な存在になっている。

また、字幕の付いた番組も増えている。試しに新聞のテレビ欄を見てほしい。通常、字幕付きの番組のタイトルの左側には、**字**というマークがある。かなり多くの番組に、このマークがあることに気づくだろう。

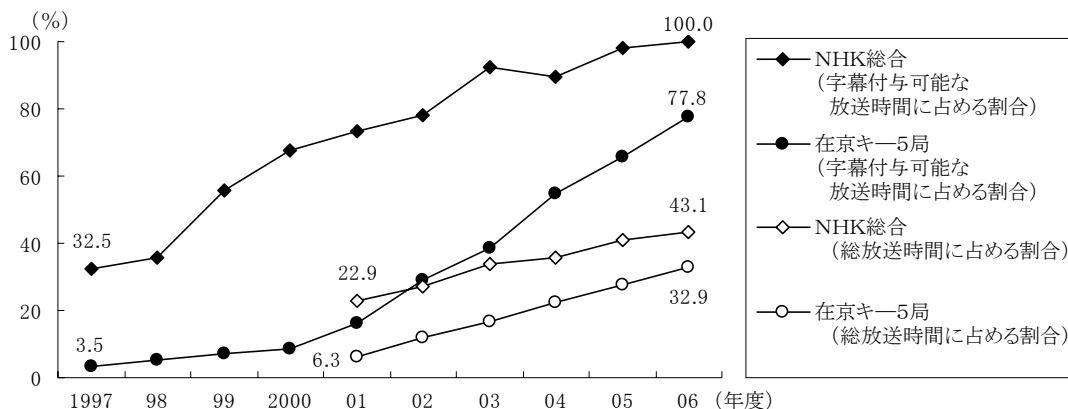
図表1に示す総務省のデータによると、「字幕付与可能な総放送時間」（図表1の注1参照）に占める字幕放送時間の割合は、1997年にはNHK総合では32.5%、民放の在京キー5局（同注2参照）ではわずか3.5%でしかなかった。しかし、この割合は10年足らずの間に増え続け、2006年にはNHK総合では100%に、在京キー5局では80%近くにまでなった。

こうした字幕放送拡大を牽引したのは、1997年11月に当時の郵政省が定めた「字幕放送普及行政の指針」である。この指針では、10年後の2007年までに字幕付与可能な放送番組のすべてに字幕を付与することなどが目標として掲げられた。前述の通り、この目標はNHK総合では1年前倒しで達成され、民放在京キー5局でももう少しのところに迫っている。

また、総放送時間に占める字幕放送時間の割合は、2006年にはNHK総合では43.1%、在京キー5局では32.9%になった。2001年からはいずれも20ポイント以上増えている。字幕付与可能な放送番組とみなされていない生放送のニュースやスポーツ中継などにも字幕が付くことが多くなったためと思われる。

前述の指針の目標時期が終了する直前の2007年10月には、2017年度に向けた新たな目標を定めた「視聴覚障害者向け放送普及行政の指針」が総務省より公表された。字幕放送に関する大きな変更点は、「字幕付与可能な放送番組」の定義に生放送番組（複数人が同時に会話を行う場合以外）や再放送番組などを含めた上で、対象番組すべてへの字幕付与を目標としたことである。対象番組の範囲が広がったことにより、字幕付きの番組は今後さらに増えると予想される。

図表1 字幕放送時間の割合の推移



注1：「字幕付与可能な放送時間」とは、次に掲げる放送番組を除く午前7時から午後12時までの放送番組の放送時間数
 ・技術的に字幕を付すことができない放送番組（例 現在のところニュース・スポーツ中継等の生番組）
 ・オープンキャプション字幕付き映画、手話等により音声の説明している放送番組（例 字幕付映画、手話のニュース）
 ・大部分が歌唱・器楽演奏の音楽番組
 ・外国語の番組
 ・権利処理上の理由等により字幕を付すことができない放送番組
 ・再放送番組

注2：在京キー5局とは、日本テレビ放送網、東京放送、フジテレビジョン、テレビ朝日、テレビ東京

資料：2006年度のデータは、総務省『平成18年度の字幕放送等の実績』（2007年6月）
 2005年度以前のデータは、総務省『デジタル放送時代の視覚障害者向け放送に関する研究会報告書』（2007年3月）

<一般の人にとっての利便性にも期待>

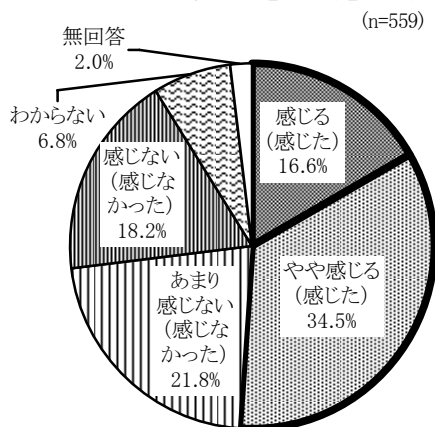
字幕放送というと聴覚障害者など一部の人のためのものと思われがちだが、耳の遠くなった年配の人などの活用可能性も高い。筆者が2007年12月に50～74歳の人を対象に実施したアンケート調査から、回答者本人やその周囲の人のテレビ視聴に関する問題点や、字幕放送に対する意識などをみてみよう。

自分の周りに耳の聞こえにくい、または聞こえない人（以下、「難聴者」）がいたことがあると答えた回答者のうち、「その人がテレビを見ている時の音が大きくて困る」と「感じる（感じた）」人は16.6%、「やや感じる（感じた）」人は34.5%であり、合わせると過半数を占める（図表2）。また、回答者自身の中にも「あなたがテレビを見ている時の音が大きくて困ると周りの人から言われる」ことが「ある」（「よくある」+「たまにある」）人は22.2%（50～64歳では20.0%、65歳～74歳では25.5%）いた（図表省略）。テレビの音量が原因で、家族などの間に摩擦が生じていることがわかる。しかし、テレビの音が聞こえにくくても内容が理解でき、音量を大きくし過ぎずに済めば、こうした摩擦は減るだろう。

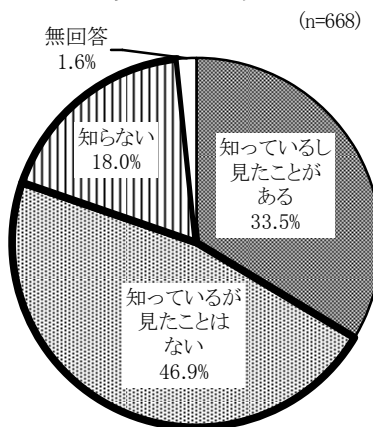
では、テレビ番組の理解を助ける字幕放送は、どの程度普及しているのか。アンケート調査では字幕放送について説明した上でその認知・視聴経験をたずねたところ、約3分の1の人が「知っているし見たことがある」と答えた（図表3）。残りの人は、字幕放送を「知っているが見たことはない」（46.9%）か「知らない」（18.0%）。つまり、中高年の約3分の2の人は、字幕放送を実際に見た経験がない。

一方、字幕放送を便利だと思いかどうかをたずねたところ、「便利だと思う」（28.1%）と「まあまあ便利だと思う」（35.3%）と答えた割合は、合わせて6割を超えた（図表4）。回答者のうち字幕放送を見たことがある人は、便利だと思っている割合がさらに高い。実際に字幕放送を見ると、便利さがよくわかるのだろう。今後、2011年の地上アナログ放送の終了に向けて地上デジタル放送対応のテレビが普及し、字幕放送を見られる人が増えれば、便利だという評価もより高まると考えられる。

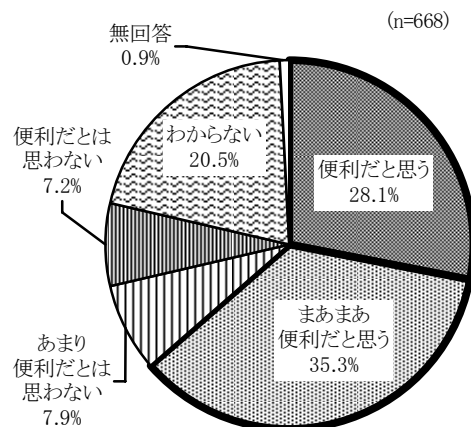
図表2 周囲の難聴者のテレビの音が大きくて困ると感じる(感じた)か



図表3 字幕放送を知っているか・見たことがあるか



図表4 字幕放送を便利だと思うか



注：アンケート調査は、当研究所の生活調査モニター700人を対象に実施し、668人より回答を得た（ただし、図表2の質問には、周囲に難聴者がいたことがあると答えた人のみが回答している）

卑近な例だが、筆者も最近、地上デジタル放送対応のテレビを購入したことにより、字幕放送を見られるようになった。字幕を表示していると、耳が聞こえる自分にとってもさまざまな利点があることを実感する。例えば、炊事や掃除をしながら、ドライヤーをかけながら、といった、音が聞こえにくい状況での「ながら見」ができる。ニュースや時代劇などで聞いた難しい言葉を文字で確認できる。海外のテレビドラマを、言語のまま楽しめる—など、数え上げればきりが無い。

<字幕放送をめぐる課題>

一方で、字幕放送には解決してほしいと感じる課題も多い。字幕が画面のテロップや人の顔などに重なると見づらい、生放送の番組では音声に比べ字幕が大幅に遅れる、などがその例だ。また、視聴者にメッセージを最も強く伝えるべきはずのCMでは字幕が一切ないため、音声を聞かないとどんな内容なのかほとんど理解できないCMがたくさんある。

CMの字幕について調査した結果*によると、CMに字幕が「欲しい」と思っている消費者は、聴覚障害者では75%、健聴者（聞こえる人）でも47%いる。一方、企業の中でこれまでにCM字幕について「検討したことがあった」と答えたのは8%のみであり、「検討したことはない」が77%、「CMに字幕を付けられることを知らなかった」が15%であった。ただし今後については、「今のところ検討する予定はない」と答えた27%の企業以外は、多かれ少なかれ検討する姿勢を示している。

テレビの番組やCMに字幕を付けることには、技術や制度、費用などの面でさまざまな課題が伴うだろうが、視聴者のニーズがあるのは確かだし、番組やCMの提供側にも視聴者層が広がり市場が拡大するといったメリットがある。より多くの人にテレビを楽しみ、情報を知ってもらうために、今後も字幕放送の拡充が期待される。

* 聴覚障害者・健聴者対象の調査は国際ユニヴァーサルデザイン協議会の「余暇のUDプロジェクト」が実施、企業対象の調査は同プロジェクトと『月刊ニューメディア』が共同で実施。回答者は聴覚障害者104人、健聴者が170人、企業が48社である。この調査の結果やテレビCMの字幕の詳細については『月刊ニューメディア』の2007年10月号と11月号に記載されている。